

C 5 大家族・核家族における子どもの発達について  
山口女大家政 松本悦子

目的 大家族・核家族という家族形態の違いが、子どもの発達にどのような影響を与えるものであるか調査研究した。

方法 対象はA幼稚園 年長組22名，年少組10名，父兄195名，B幼稚園父兄55名，子どもの性格は「太郎・花子テスト」を使用，両親の養育態度とみるために「田研式親子関係テスト」及び調査票（著名居室）を実施した。

時期 昭和56年6月25日～7月25日

結果 1. 性格検査における分析結果は、表1にみられるように、核家族は大家族に比

	大家族		核家族	
人数	16		16	
	m	SD	m	SD
独立—依存	-0.25	0.90	-0.13	1.45
活動性—活動性小	-0.56	0.86	0.13	0.97
反抗的—ふたい	-0.44	0.86	0.25	1.09
反抗的—従順	0.13	1.17	-0.69	1.40

表1 太郎・花子テスト結果

し、独立的で活動性も大きく、反抗的傾向である。但し独立—依存において核家族のSDも大であることに注目して行い。

2. 田研式親子関係テスト結果は、両者とも差はみられず、母親においては、消極的拒否<sup>カガ</sup>、積極的拒否<sup>カガ</sup>とも標準危険地帯（20～50パーセントイル）である。父親においても同様に消極的拒否が標準危険地帯である。矛盾、不一致型については核家族の母親が30、35パーセントイルと低く問題である。